立教経済学研究　第73巻第２号　2019年10月　pp. 289-294

黒木龍三先生の人と学問

長　原　　徹

黒木龍三先生は，2019年３月をもって立教大学経済学部を定年退職された。

はじめに先生の経歴について簡単に触れたいと思う。黒木先生は，1953年福岡県に生まれ，1972年に愛知県立時習館高等学校を卒業されると同時に上京され，早稲田大学政治経済学部に入学された。1976年に同学部を卒業された後，財団法人電力中央研究所（以下，電中研）へ研究員として就職された。電中研では経済研究所に配属され，各国の資源エネルギー政策を研究する部門で活躍されたが，この経験は先生が本来備えていた研究者としての衝動を駆り立てたのであろう，1977年に早稲田大学大学院修士課程に進学され，電中研を退職された。さらに，博士課程では京都大学大学院に進学され，１年間の日本学術振興会研究員生活を経て，1985年に最初の就職先となる大阪産業大学経済学部に専任講師として奉職された。その後，1994年に茨城大学人文学部へ転勤され所帯を関東に移すと，1996年に立教大学経済学部へ助教授として就職された。1998年には教授へ昇格され，2002年からは立教大学大学院経済学研究科だけでなく同大学院ビジネスデザイン研究科でも教鞭をとられることになった。黒木先生は，立教大学在職23年間にわたり，研究面で最前線でご活躍されたのはもちろん，教育面でも何名もの研究者を輩出するなど，精力的かつ丁寧に学生を指導されてきた。

こうして輩出された一名である筆者が，黒木先生の「人と学問」を執筆させていただくのは大変光栄であるのは言うまでもない。しかしながらそれ以上に，今回改めて先生の研究者としての足跡を辿るべく，先生がこれまで執筆されてきた数多くの論文，著書を読む機会を持った筆者にとっては，黒木先生こそが研究者の鏡であるという認識を強く抱いた次第である。以下では，先生の研究業績を振り返りながら先生が経済学の世界に残してきた爪痕を紹介するとともに，筆者の先生との思い出を挙げることで，先生の研究者スピリッツを僭越ながら紹介したいと思う。

先生の学問

黒木先生が早稲田大学に入学された1972年とは，同年２月に連合赤軍浅間山荘事件が発生したことに象徴されるように，日本において過激派組織によるデモ活動が続いていた時代である。学生運動が下火を迎えつつあった時代とはいえ，先生が入学された早稲田大学でも依然として一部の学生による教員糾弾が行われていたことを，先生の思い出話として筆者は耳にしたこと

がある。そうした時代に，黒木先生は国際経済学・経済発展論の大家である早稲田大学の西川潤教授の指導を受けたいと考え，積極的に早稲田大学への進学を希望されたそうである。この話は黒木先生の研究者としての萌芽が垣間見られるエピソードと言えそうである。1990年代に大学へ入学し卒業した筆者らの世代の多くが，大学は就職前の最後のモラトリアム期間と考えていたのとは正反対であり，先生の話に驚愕したことを筆者は今でも憶えている。また，学部ゼミでは日本語の文献をほとんど使わず，学部４年次に執筆した卒業論文は当時英語版が出たばかりのアルジリ・エマニュエルの国際的不等価交換論に関するものだったことを，先日の座談会で初めて耳にした。このエピソードは，先生の研究者としてのアニマルスピリッツが西川潤教授のご指導によって育まれていったことを表すものと言えよう。

その後，黒木先生は一度民間の研究所（電中研）に就職した。1976年４月に入所された当時，日本はオイルショックを受けた石油価格高騰の余韻冷めやらぬ時期であった。中東依存度の高い石油について調達の多様化が検討されたり，化石燃料をエネルギー源とする構造へのリスクから原子力発電の重要性が議論されたりと，日本はエネルギー政策の転換期を迎えていた。そうした中，先生は各国の資源エネルギー政策を研究する部門で研究を進められ，1977年には先生にとって初の論文となる「各国のエネルギー政策」を公刊された。その時すでに先生は早稲田大学大学院にも通われており，電中研と大学院という二足の草鞋を履かれていた。今でこそ社会人大学院といった言葉が当たり前になったが，それよりはるか以前に，先生は社会人として働きながら大学院へも通われていたのである。

黒木先生はこの頃，人生の大きな転機を迎えたのではないかと思われる。すなわち，研究と仕事という二兎を追うのを止め，研究一本に絞ったのである。先生は電中研を辞め大学院での研究に専念された。大学院修士課程ではシュンペーターの大家である伊達邦春教授に師事するとともに，早稲田大学院に兼任講師として当時出講されていた福岡正夫教授や川口弘教授の教えも受けていた。そこでの出会いや指導は，先生が経済学における幅広い分析手法――モデル分析や歴史分析――に精通する端緒になったものと推測される。先生は，スラッファ『商品による商品の生産』（原題：*The Production of Commodities by Means of Commodities*）やパシネッティ『生産理論』（原題：*Lectures on the Theory of Production*），森嶋通夫『マルクスの経済学』（原題：*Marx's economics*）の原書をもとに修士論文を執筆された。そして，それがその後薫陶を受ける菱山泉教授との出会いであった。というのは，ちょうどこの頃菱山教授が上掲のパシネッティの訳本を出版された時期であり，この縁もあって先生は，菱山教授が所属されていた京都大学大学院の博士課程に進学されたからである。

大学院博士課程時代に執筆された論文のなかに「再生産と利潤率」（京都大学経済学会『経済論叢』第131 巻第６号，1983年所収）がある。これは，貨幣資本が消費財と資本財の部門間利潤率格差に応じて振り分けられ，原材料が購入されることで，実物資本が両部門に配分されるというモデルに立脚している。そして，投入係数行列の性質によって体系が収束したり発散

したりするという結論が得られているが，このことが示唆するのは以下のとおりである。すなわち，部門間の相互依存性が強い場合，例えば工業部門が成長するために農業部門の生産物をたくさん使うといったような場合に体系は収束して安定する一方，依存性が弱く工業の発展のために工業製品をたくさん使うような自己依存性が強くなる場合，体系は発散する傾向が強くなるというものである。なお，立脚する経済モデルにはリヤプノフ関数が組み込まれており，そのもとで均衡の安定性が証明されるなど，同論文は数学的手法がふんだんに駆使された精緻を極めたものである。後述するが，筆者もこうした洗練された論文に憧憬の念を抱き，黒木先生のご指導を受けたのである。

先生はその後1985年に大阪産業大学経済学部に就職された。在職中の1986年，上掲の論文を発展させた“The Equalization of the Rate of Profit Reconsidered”という単著論文を，米国ニュースクールのウィリー・ゼムラー教授が編者となって出版された書籍（原題：*Competition, Instability, and Nonlinear Cycles*）の中で発表された。この論文では，一橋大学の二階堂副包教授の助言をもとに，先掲の論文における部門間資本移動について，より現実妥当性をもったモデルに改良されたもとでの分析が行われており，サミュエルソンらによる多部門モデルにおける双対不安定性定理に対する反論として位置づけられる。同論文は海外の研究者からしばしば引用されることになり，こうして黒木先生は研究の舞台を世界へと広げることになった。そして，その後しばらくして先生はニュースクールからの招聘を受けて1990年から一年間ほど特別研究員として在外研究生活を送ることになったのである。

米国での在外研究は人脈を広げる機会になっただけでなく，先生の研究領域を拡張させることにもなったようである。前者については，旧知の仲である中央大学の浅田統一郎教授とニュースクールで研究を共にしただけでなく，国士舘大学の野下保利教授ともそこで初めて出会い，先生は交流の輪を広げていったのである。これら両教授とはその後の学会や研究会等で互いに批判しあえる関係を築いたが，詳細は両教授も招いて行われた対談をご覧いただきたい。一方，後者の研究面では，当時公刊されて間もないミンスキーの『金融不安定性の経済学』（原題：*Stabilizing an Unstable Economy*）に注目し，ミンスキー理論のモデル化に着手した。その研究成果は1991年１月にピッツバーグで開催された学会で報告されたのを皮切りに，帰国後もいくつかの書籍，雑誌，紀要，新聞紙上で発表された。特に，日本経済新聞紙上で10回にわたって連載された「やさしい経済学　金融不況の読み方」では日本の新聞紙上ではじめてミンスキー理論が紹介されたのではないかと思われる。先生が開発したミンスキーモデルはGDPの変動と負債の増減を連関させたもので，詳細の説明は割愛させていただくが，黒木先生の学部授業を受講したことがある学生なら一度は見たことがあるであろう「ミンスキーサイクル」の図がこの理論のほとんどのことを教えてくれる。2008年のリーマンショックから始まる金融不況においてミンスキーの業績が脚光を浴びることになったが，それに先立って先生はミンスキー理論の体系化に取り組まれ，金融由来の深刻な経済不況に警鐘を鳴らしていたのである。

黒木先生は1996年に立教大学へ籍を移された。立教大学に研究拠点を移されて以降も先生は精力的に研究を進められたが，筆者が先生と初めて出会ったのもその頃である。当時前期博士課程の大学院生であった筆者は，先生が2000年に発表された論文「利子率体系と活動水準」(立教大学経済学研究会『立教経済学研究』第53巻第４号，2000年所収）において繰り広げられていた精密かつ高度に抽象化された分析手法に感嘆したものである。そして，こうした分析手法こそ筆者が修士論文の柱とすべきものであるという思いを強くし，黒木先生の研究室に所属したのである。筆者が先生の研究室に在籍中受けた指導については後述することとし，先生はその後2006年にケインズ『一般理論』刊行70周年を記念したシンポジウムを二つ主催され，立教大学の学術振興に多大なる貢献を果たされた。このうち一件は国際シンポジウムであり，ニュースクールのエドワード・ネル教授とウィリー・ゼムラー教授，オーストリアのグラーツ大学のハインツ・クルツ教授，大阪大学の小野善康教授が招待された。なお，このときのシンポジウムの研究成果は，2013年に黒木先生が編者となって上梓された *Keynes and Modern Economics* という書籍のなかにまとめられている。もう一件のシンポジウムは立教大学経済学部創設100周年記念の一環として開催されたものであり，黒木先生が大学院時代に指導を受けた慶應義塾大学の福岡正夫教授が招待され，「ケインズと現代経済学」というタイトルで講演が行われた。

先生はこの『一般理論』70周年シンポジウムを主催されたころから，フランス経済学史を並行して研究されるようになった。そして，この分野に打ち込むようになってから今日まで毎年，ヨーロッパ経済学史学会で研究報告をされてきている。これまで一貫してモデル分析に立脚した研究をされてきた先生が突然，学史研究に従事することになった経緯を筆者は全く知らなかったが，そのきっかけが先生の大学院時代にまで遡ることを先日の座談会で初めて知った。黒木先生の研究者としての原点が先生の学生時代にあることは先述した通りだが，このように30年近く前に関心を持ったことを変わらず関心を抱き続けるという知的好奇心を持つ姿勢こそが研究者としてのあるべき姿であり，先生に見習うべきものであると，筆者は今回思った次第である。

先生の人

筆者が黒木先生の指導を受けるようになってから20年近くの時間が経ったが，公私にわたり先生から受けた御恩は筆舌に尽くしがたい。研究面では，分析手法の指導など技術面だけでなく研究への向き合い方など精神面での指導も受けてきた。さらに，院生時代に筆者が執筆した論文や学位論文に対して，多大な時間を費やすことがあっても，最初の査読者として丁寧な助言や指摘をいただいた。例えば，筆者が修士論文を発展させたものを立教大学の紀要に投稿する際いただいた助言は今でもよく憶えている。それは「学者にとって，論文を公表するのは身

体に刺青をいれるようなもので，いったん世に出したものは永久に残ってしまう。だからこそ，誤字脱字をゼロにし，論理的整合性の欠陥を完全になくしたものを発表しなければいけない」というものだ。また，大学院の授業の中で，近代経済学理論だけでなく学説史をテーマに議論することもあったが，そのなかで先生は次のようなことをおっしゃられていた。それは「自己批判できないものは学問ではない」といった言説である。筆者はこの言葉を現在教えている本務校の学生達にしばしば紹介している。ともすれば，絶対的に正しい解答が存在すると思って疑わない理系の学生達に対して，直線的思考の危うさを戒めるためにも自己を省みることの必要性を説きたいと考えるからである。

他にも，先生の交流の輪に加えてもらう形で，筆者は多くの研究者を紹介してもらうだけでなく研究会や学会での活躍の場を用意してもらえることになった。中でも，黒木先生がその設立に大きく関与したケインズ学会については特筆しておきたい。同学会は2010年に設立が決まり，上智大学の平井俊顕教授を筆頭に，黒木先生も設立発起人に名を連ね，2011年の第１回全国大会から実質的に発足した。黒木先生は発足当初から同学会の幹事を務め，現在は３期目に入られている。2014年には同学会の全国大会を立教大学に誘致し，日本を代表するケインジアンであるイェール大学の浜田宏一教授を招聘するなど，大会組織委員長として手腕を振るわれた。筆者も現在まで同学会で多くの仕事をする機会に恵まれたが，これは黒木先生のご推薦があったからに他ならない。

私生活面でも，最近特に，先生にアドバイスを受けることが多くなった。これは，先生の家族構成と筆者の家族構成が似ているからだと思われる。先生のご家庭には二人のご息女がおり，ご長女は慶應義塾大学を卒業後リクルート社に就職され，現在は結婚されており，ご次女はバイオリン奏者としてフランスで活躍されているそうである。掛け値なしに，お二人とも自慢の娘であろう。先生がこうしたお二人の成長ぶりを話すときはいつも優しいお父さんの顔に戻るのが印象深いのだが，同様に娘を持つ筆者にとっては，このように立派な大人に育て上げた先生の家庭の教育方針に学ぶところが多いのである。

終わりに

以上，黒木先生のこれまでの研究を振り返り，筆者が指導を受ける中で垣間見てきた先生の人物像を書かせていただいた。改めてここまでの文章を読み返すと，先生はなるべくしてなった研究者と言えるのではないかという思いを筆者は強くした。というのも，学生時代に興味を抱いた研究テーマについて30年近く経過してから改めて研究しなおすというのは，好奇心旺盛という言葉だけでは片づけられないからである。何か使命感のようなものを持っていなければ，一度手付かずになったテーマに対する関心は数10年間も持続しないのではないだろうか。このような研究への態度こそわれわれ研究者が学ぶべきものであり，先生の研究者精神の根幹にあ

るものなのだろう。先生の指導を受けてきた弟子の一人として，この精神を糧にしていきたいと思う。

最後になるが，黒木先生は筆者が大学院に在籍する頃から風邪などで体調を崩されることが多かった。それもあってか，先生は漢方処方などにも詳しく，風邪を引いた筆者に対し，よく効く漢方薬を教えてくれたものである。先生による好奇心の探求はまだ道半ばのはずである。今後も身体をご自愛いただき，先生のさらなるご活躍を祈念して本文を終えることとしたい。

参考文献

本文中で取り上げた黒木先生が執筆した書籍，論文は以下のとおりである。

黒木龍三（1977）「各国のエネルギー政策」，電力中央研究所

黒木龍三（1983）「再生産と利潤率」『経済論叢』第131巻第６号，343-64ページ，京都大学経済学会（以下の URL から論文の全文を取得可，アクセス日2019年８月12日）
(https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/133981/1/eca1316_343.pdf)

Ryuzo KUROKI (1986) “The Equalization of the Rate of Profit Reconsidered,” in *Competition, Instability, and Nonlinear Cycles* (ed. by W. Semmler), Springer-Verlag

黒木龍三（1998）「やさしい経済学　金融不況の読み方」日本経済新聞，11月30日～12月11日連載

黒木龍三（2000）「利子率体系と活動水準―銀行組織を中心にした貨幣的一般均衡分析」『立教経済学研究』第53巻第１号，１-16ページ，立教大学経済学研究会（以下の URL から論文の全文を取得可，アクセス日2019年８月12日）
(https://rikkyo.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=2669&file_id=18&file_no=1)

Ryuzo KUROKI (2013) *Keynes and Modern Economics*, Routledge